

国際教育研究フォーラム

第 107号

2026年 7月

国際教育研究所

目次	頁
留学生市場の再編と日本への示唆	小山悦司 1
地域住民、生息国研究者との協働による野生ニシローランド ゴリラの長期野外研究	竹ノ下祐二 2- 8
岡山理科大学留学生別科における日本語教育の参照枠を踏まえた プレイスメントテスト見直しの試み	益谷美香 9-15
編集後記	15

留学生市場の再編と日本への示唆

国際教育研究所所長 小山 悦司

近年、留学生の国際的な移動は、従来の経済的要因や教育の質だけでなく、政治情勢や安全保障、各国の移民政策など、教育以外の要因によって大きく左右されるようになってきている。特に、米国における留学生受入れ政策の厳格化や、ウクライナや中東における戦争・紛争は、世界の留学生市場の再編を促している。

米国では、トランプ政権下で学生ビザの審査強化や大学への規制が進められ、留学希望者は急減した。また、カナダや豪州でも相次いで留学生の受け入れ上限（キャップ制）が導入されるなど、主要国での受入れのハードルが高まりつつある。こうした状況を受け、英国や欧州諸国など、ビザ手続きが安定し、受入れに寛容な地域へと需要が多極化してきている。

同時に、ウクライナや中東の戦争・紛争は、周辺地域の学生の留学先選択に影響を与え、安全性・安定性を重視する志向を強めている。留学生市場では、従来の米英加豪「ビッグ4」への集中が弱まり、ドイツ・フランス・日本・シンガポールなどへの移動が増加している。

主要国の規制強化が進む一方で、世界全体の留学生数は長期的に増加傾向（右肩上がり）を維持している。ただし、増加の中心は中国・インドなどの従来の大国だけでなく、ウズベキスタン・カザフスタン・モロッコなど「新興送出国」にも拡大している。欧米が間口を狭めたことに加え、主要国の物価高騰や住宅不足により地域内移動（例：アジア域内留学）が増加し、「留学先」の分散化が進む傾向がみられる。

以上のような留学生市場のトレンドは、日本にとって優秀な留学生を呼び込む好機と捉えられる。少子化による学生数の減少や高度人材不足が進む中、留学生を教育の対象としてだけでなく、日本社会や産業を支える人材として育成・定着させる視点が、これまで以上に重要となる。そのためには、英語による教育プログラムの充実、研究環境の国際化、卒業後の就職支援や在留制度の整備などを総合的に進める必要がある。また、地域社会や企業との連携を強化し、留学生が安心して学び、働き、生活できる環境を整備することも不可欠である。

これらの取り組みは、日本の高等教育の国際競争力を高めるとともに、持続可能な社会の実現にもつながる重要な課題である。留学生政策は教育政策にとどまらず、国の将来を左右する人材戦略の一環として再構築されるべき時代を迎えている。

地域住民、生息国研究者との協働による野生ニシローランドゴリラの長期野外研究

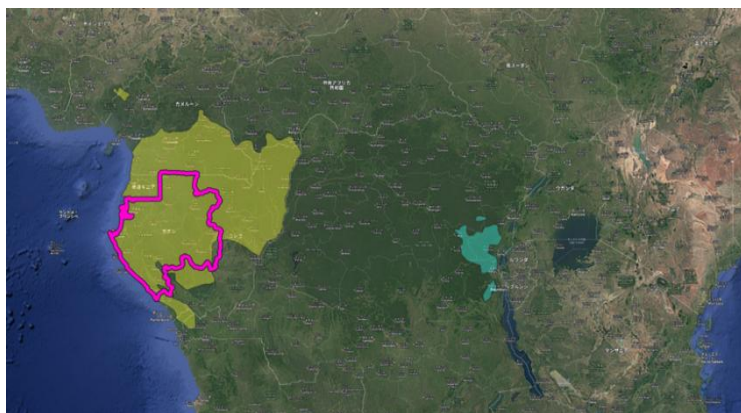
岡山理科大学 理学部動物学科 教授 竹ノ下 祐二

はじめに

ゴリラ (*Gorilla* spp.) は、アフリカ熱帯林の生態系を特徴づけるキーストン種であると同時に、ヒトにもっとも近縁な大型類人猿の一種として、われわれヒトの進化を考えるうえで欠くことのできない「生きた化石」である。筆者らは1999年より、ガボン共和国ムカラバ・ドゥドゥ国立公園において、ゴリラをはじめとする野生動物の長期野外研究を継続してきた。本稿では、この四半世紀あまりにわたる研究の経緯と現状、そして地域住民および生息国の研究者との協働によるゴリラの保全にむけた取り組みについて報告する。

1. ゴリラとは

ゴリラは霊長目ヒト科ゴリラ属の動物で、現在では2種4亜種に分類される。推定生息数は約38万頭で、その大部分をニシローランドゴリラ (*Gorilla gorilla gorilla*) が占める。ニシローランドゴリラは、ガボン、コンゴ共和国、中央アフリカ共和国、赤道ギニア、カメルーンにまたがる中部アフリカの熱帯林に生息しており、なかでもガボンはその分布の中心である(文献1; 図1)。ガボンでは国土のほぼ全域にニシローランドゴリラが生息し、種全体の40%以上がこの一国に集中しているといわれる。ゴリラの生態と社会を理解し、その保全策を講じるうえで、ガボンにおける野外研究がきわめて重要な意味をもつゆえんである。



【説明】

黄色がニシゴリラ、水色がヒガシゴリラの分布域。
ピンク色がガボンの国境線

図1 ゴリラの分布 (IUCN RedList のデータより作成)。

2. ムカラバ・ドゥドゥ国立公園における長期野外研究

(1) 調査地の概要

ムカラバ・ドゥドゥ国立公園は、ガボン南西部に位置する、ガボンに 13 ある国立公園のひとつである。1962 年に設立された動物保護区・森林保護区を母体とし、2002 年に国立公園に指定された（文献 2）。総面積は約 5,028 平方キロメートルにおよぶ。1980 年代からゴリラ・チンパンジーの生息密度が高いことが知られていたが（文献 3）、1990 年代から 2000 年代にかけてガボン北部からコンゴにかけての地域でエボラ出血熱が大流行し、ゴリラの個体数が激減するなかで（文献 4）、ムカラバ地域はその難を逃れた。大都市から遠く、アクセスが悪いことが、結果として野生動物の高密度な生息を可能にしてきたのである（文献 5）。

(2) 調査の開始と体制づくり

筆者は 1999 年にムカラバで予備調査をおこなった。わずか 1 週間の滞在であったが、1997～98 年に学位研究のため滞在していたプチロアンゴでの経験と比べても、ゴリラとの遭遇頻度は非常に高く、長期調査地として大きな可能性を感じさせるものであった。2000 年には広域調査、2002 年には密度調査をおこなった。その結果、ムカラバのゴリラの密度は世界一——といってよいほどであることが判明した（文献 6）。そこで、長期調査にむけた環境整備——キャンプ地や調査路の設営、そして地域住民との協働体制の構築——を進めた。そして 2003 年より、ゴリラの群れを対象とした「ヒトづけ」を開始した。

(3) ゴリラのヒトづけ

ヒトづけとは、動物に餌をあたえて餌に慣れさせる「餌付け」とは異なり、餌をあたえずに人間の観察者の存在そのものに慣れてもらうプロセスである。野生のゴリラは人間を恐れ、研究者と遭遇するとすぐに逃げってしまうため、まずはゴリラに人間に慣れてもらうことが必要なのである。

われわれは、ゴリラのヒトづけのプロセスを 3 段階に分けて進めることにした。第一段階はヒトづけ対象となる群れの識別（identification）、第二段階が対象群の遊動域の特定（localization）、そして第三段階は対象群のメンバーによる観察者の受容（habituation）である。このどの段階においても、何より重要なことは、毎日森を歩いてゴリラを探し、出会ったゴリラを愚直に追跡するという地道な作業である。これを担ったのが安藤智恵子さんである。安藤さんは、調査地の周辺の村に暮らす人々とともに、足掛け 6 年の歳月をかけて、グ

ループ・ジャンティ (GG) と名づけたゴリラの群れのヒトづけを成し遂げた。そのプロセスは最近彼女自身の手によって出版されたところである (文献7)。それは途方もない努力であった。

まず、対象群である GG の識別には約半年を要した。続く localization の段階では、かれらの食性を知ると同時に森の中の食物の分布を把握するため、フン分析による食性解析や果実のフェノロジー (植物の開花・結実季節) 調査によって情報を蓄積しながら、同じ群れとの出会いを増やしていった (文献8)。そして安藤さんがヒトづけをはじめてから4年後、筆者をはじめてムカラバを訪れてから数えると8年目にあたる2007年8月に、ついにその月の調査日すべてで GG に遭遇できるようになった。そして、2008年ごろには、個体間の社会交渉を間近で直接観察できる水準にまでになった (文献9)。

ニシローランドゴリラの群れは1頭のオトナオス (シルバーバックと呼ばれる) が配偶関係を結んだ複数のメスとそのコドモたちからなる、一夫多妻型の家族的な集団である。GG は識別された時点ですでに20頭以上の大きな群れであった。その後、2016年には高齢となったシルバーバックのパパ・ジャンティが消失 (死亡) したが、2017年には残された個体が移入した群れ (ニダイ群: GN) をあらたにヒトづけし、現在も複数の研究者によって調査研究が続けられている。

(4) ゴリラを深く研究する

日々のゴリラの調査は、ゴリラを探すことから始まる。そして、ゴリラに出会ったらまずすることは、ゴリラへの「あいさつ」である (図2)。ゴリラどうしがあいさつをするときに出す「ググーン」という音声をまねて、観察者がかれらに敵意がないことを示し、受けいれてもらうのである。人間による「ゴリラ語」はおそらくあまり上手ではないのだろうが、寛容なかれらは受けいれてくれる (筆者がゴリラにあいさつする様子は Youtube で見ることができる <https://youtu.be/zPXz73t0h-U?si=OmJsgi5jv4s12Bar>)。



【説明】

シルバーバックのパパ・ジャンティがじっと観察者をみつめ、背中をそらせてディスプレイをしている。

図 2 GG との遭遇の一例。

こんにちまで、筆者らの研究グループでは多くの日本人およびガボン人研究者、そして地域住民との協働により、多くの研究成果が得られている。それらのいくつかを紹介する。これまで、チンパンジーが肉食の場面で食物分配をよくすることは知られる一方、野生ゴリラの食物分配の観察はまれであったが、ムカラバでは大型の果実が得られた時に平和的に分け合って採食するなどの食物分配行動が観察された（文献 10、文献 11）。発達に関して、長期調査によるデータから、ニシローランドゴリラの身体の発達や離乳のタイミングがヒガシゴリラと異なる傾向がみられることが示唆された。識別された個体の糞から採取した DNA をもとに血縁関係を解析し、群れで生まれた子がすべてシルバーバックの子であることが確定された（文献 12）。社会変動（優位オスの交代など）が個体の分散パターンにどう影響するかが検討されてきた（文献 13）。最近では、田村大也が世界ではじめてゴリラの採食における群れレベルの利き手があることを採食行動の丁寧な観察からあきらかにした（文献 14）。このほか、文化社会人類学と協働した社会学的研究（文献 15）など、研究の幅はさらに広がっている。

3. ゴリラの保全

（1）野生ゴリラをとりまく脅威

ニシローランドゴリラは IUCN（国際自然保護連合）のレッドリストにおいて「近絶滅種（Critically Endangered）」に分類されている（文献 1）。その脅威の多くは人間活動に由来する。第一に商取引を目的とした狩猟、第二に資源開発や農地拡大による生息地の減少・分断、第三に人間との接触機会の増加にともなう感染症——エボラ出血熱はその典型である——、

そして第四に内戦や地域紛争である。紛争下では保護活動が中断するだけでなく、兵士の食料確保のための狩猟や、ゴリラが交渉の材料として扱われることさえある。

(2) 地域住民とともにある保全へ

これらの脅威に対応するためには、狩猟の禁止や開発の抑制、保護区によるゾーニングなど、地域住民の生活を一定程度制限せざるを得ない場面がある。しかし、そうした制限は住民の生活そのものへの脅威となりうる。ムカラバ周辺の住民の多くは、焼畑農耕や漁撈、狩猟によって自然資源に頼った暮らしを営んできた。保全のための規制は、こうした生業活動そのものを狭めることにもつながりかねない。ゴリラだけでなく、その生息地に暮らす人々もともに幸福になる道を探らなければ、保全は持続しない。

そこで筆者らは、地域住民とともにゴリラの保全と地域の発展を両立させる方法を、次の4つの柱で模索してきた。第一に、基礎研究によって科学的データを蓄積し、それにもとづいた保護政策を立案すること。この過程では、生息国であるガボン人研究者の育成と協働が欠かせない。第二に、ゴリラとヒト双方の健康リスクを把握し、安全な接触のマナーを確立すること（ワンヘルスの視点）。第三に、生活の制限が不可避である以上、それによる不利益を代替する生計手段——エコツーリズム（文献16）や、保全活動に関わるための人材育成（キャパシティ・ビルディング）——を創出すること。そして第四に、自然と文化の価値およびその保全の重要性を伝える教育啓発活動である。

(3) PROCOBHA プロジェクトとその後

これらの取り組みは、2009年から2014年にかけて実施されたJICAの科学技術協力事業（SATREPS）の課題「野生生物と人間との共生を通じた熱帯林の生物多様性保全（PROCOBHA）」として具体化された（文献17）。本事業には日本とガボン双方から多分野の研究者が参画した。プロジェクト終了後も、ガボン人研究者との共同研究の推進やエコツーリズムの改善は継続されている。また、保全の成果として人とゴリラ・チンパンジーなど大型類人猿の双方の個体数がともに増加し、「共存」がかえって新たな軋轢——農地への獣害など——を生む局面も現れており、その対策も現在進行形の課題となっている。

おわりに

1999年に始まったムカラバでの長期野外研究は、四半世紀を経て、ゴリラの生態や社会に関する基礎的な知見の蓄積にとどまらず、地域住民や生息国研究者との協働による保全の実

践へと発展してきた。しかし、こうした活動は決して一人で成し遂げられるものではない。今後も、日本とガボン、研究者と地域住民、それぞれの協働の輪を広げてゆきたいと考えている (図3)。



図3 長期調査のパートナーである地域住民のみなさんと (撮影: 鈴木滋)

謝辞

本稿は、2026年3月14日に開催された加計学園国際教育研究所の定例研究会での発表を再構成しまとめたものである。国際教育研究所所長の小山悦司先生、研究会にお声がけくださった高原周一先生ほか、同研究所のみなさまにお礼申しあげる。

本文中でも触れたが、本稿で報告した研究と保全活動は、多くの日本人、ガボン人の研究者、地域の方々との協働により実施しているものである。指導教員でもありプロジェクトの代表者であった山極寿一氏、ゴリラのヒトづけに多大な尽力をした安藤智恵子氏をはじめ、調査隊のすべてのメンバー、そして長きにわたり筆者らを受けいれともに活動してくださっている、ドゥサラ村およびその周辺村落の住民のみなさまに感謝申し上げる。本研究報告は、JSPS 科研費 JP25K02357 の助成を受けて執筆した。

参考文献等

1. Maisels, F., Bergl, R.A. & Williamson, E.A. 2018. *Gorilla gorilla*. The IUCN Red List of Threatened Species 2018: e.T9404A136250858.
2. 竹ノ下祐二「ガボン、ムカラバ＝ドゥドゥ国立公園の類人猿の調査と保護の現状」『霊長類研究』20巻1号, 71-72頁, 2004年. DOI: 10.2354/psj.20.71
3. Tutin, C.E.G. & Fernandez, M. 1984. Nationwide census of gorilla (*Gorilla g. gorilla*) and chimpanzee (*Pan t. troglodytes*) populations in Gabon. *American Journal of Primatology*, 6(4), 313-336.
4. 竹ノ下祐二「大型類人猿の保護における感染症問題」(総説)『霊長類研究』21巻1号, 47-

64 頁, 2005 年. DOI: 10.2354/psj.21.47

5. Walsh, P.D. et al. 2003. Catastrophic ape decline in western equatorial Africa. *Nature*, 422, 611-614.
6. Takenoshita, Y. & Yamagiwa, J. 2008. Estimating gorilla abundance by dung count in the northern part of Moukalaba-Doudou National Park, Gabon. *African Study Monographs*, Supplementary Issue 39, 41-54.
7. 安藤智恵子『西のゴリラは樹上で眠る——パパ・ジャンティとその家族』(新・動物記 12) 京都大学学術出版会、2026 年 3 月刊、ISBN 978-4-8140-0636-6
8. Takenoshita, Y., Ando, C. & Yamagiwa, J. 2008. Fruit phenology of the great ape habitat in the Moukalaba-Doudou National Park, Gabon. *African Study Monographs*, Supplementary Issue 39, 23-39.
9. Ando, C., Iwata, Y. & Yamagiwa, J. 2008. Progress of habituation of western lowland gorillas and their reaction to observers in Moukalaba-Doudou National Park, Gabon. *African Study Monographs*, Supplementary Issue 39, 55-69.
10. Yamagiwa, J., Tsubokawa, K., Inoue, E. & Ando, C. 2015. Sharing fruit of *Treculia africana* among western gorillas in the Moukalaba-Doudou National Park, Gabon: Preliminary report. *Primates*, 56(1), 3-10. (電子版公開: 2014 年)
11. Iwata, Y. 2014. Food dropping as a food transfer mechanism among western lowland gorillas in Moukalaba-Doudou National Park, Gabon. *Primates*. DOI: 10.1007/s10329-014-0417-3
12. Inoue, E., Akomo-Okoue, E.F., Ando, C., Iwata, Y., Judai, M., Fujita, S., Hongo, S., Nze-Nkogue, C., Inoue-Murayama, M. & Yamagiwa, J. 2013. Male genetic structure and paternity in western lowland gorillas (*Gorilla gorilla gorilla*). *American Journal of Physical Anthropology*, 151(4), 583-588.
13. 竹ノ下祐二ほか「ガボン、ムカラバ-ドゥドゥ国立公園のニシローランドゴリラにおける、核オスの消失後の社会変動」第 34 回日本霊長類学会大会、2018 年 7 月 14 日
14. Tamura, M. & Akomo-Okoue, E.F. 2021. Hand preference in unimanual and bimanual coordinated tasks in wild western lowland gorillas (*Gorilla gorilla gorilla*) feeding on African ginger (Zingiberaceae). *American Journal of Physical Anthropology*, 175(3), 531-545.
15. 竹ノ下祐二「群れ生活における公共性と配慮」(第 11 章) 河合香吏編『社会性の起原と進化 始論——種と性を越えた比較研究のために』京都大学学術出版会、2025 年 3 月
16. Takenoshita, Y. 2015. From vision to narrative: A trial of information-based gorilla tourism in the Moukalaba-Doudou National Park, Gabon. *Tropics*, 23(4), 185-193.
17. 山極寿一, 竹ノ下祐二「野生生物と人間との共生を通じた熱帯林の生物多様性保全」『農学国際協力』11 号、109-118 頁、2010 年

岡山理科大学留学生別科における日本語教育の参照枠を 踏まえたプレイスメントテスト見直しの試み

岡山理科大学 留学生別科 益谷 美香

1.はじめに

岡山理科大学の留学生別科には、多様な学習背景や目的を持つ学生が在籍している。入学時に行われるプレイスメントテストは、学生一人ひとりの能力を把握し、その後の学習を効果的に進めるために適切なクラスに配置するという意味で、重要な教育活動の出発点である。

これまで本別科では、プレイスメントテストとして文字・語彙・文法の知識を中心とした記述式の試験を実施してきた。しかし、学生の日本語学習歴や漢字使用経験には差があり、筆記試験の結果と実際のコミュニケーション能力が必ずしも一致しない場合があった。例えば、筆記試験では高得点を示す一方で、実際のコミュニケーション場面でのやりとりで課題が見られる学生や、反対に、文字知識には課題があっても口頭でのやりとりでは円滑に課題を達成できる学生が見られた。

こうした課題を踏まえ、本別科では、従来のペーパーテストだけでは把握しにくい「やりとり」の能力について、どのように評価するかを検討するようになった。そこで本別科では、「やりとり」の力を把握する方法の一つとして、JFSに準拠したロールプレイテストをプレイスメントテストに導入した。本稿では、ロールプレイテスト導入の背景と目的を整理するとともに、導入前後における評価方法の変化や、本別科における意義について報告する。

2. 日本語教育の参照枠の導入と評価観の転換

近年、日本語教育を取り巻く環境は大きく変化している。留学生や在留外国人の増加に伴い、日本語教育の質保証に対する社会的要請も高まっている(文化庁, 2021)。こうした状況を背景として、「日本語教育の参照枠」の公表に加え、認定日本語教育機関制度や登録日本語教員制度の創設など、日本語教育の質の向上に向けた制度整備が進められている。本章では、「日本語教育の参照枠」の概要と、それが日本語能力評価の考え方に与えた影響について述べる。

2.1 参照枠の概要と CEFR・JF スタンドードとの関係

「日本語教育の参照枠」は、多様化する日本語学習者が、日本語を用いて「社会の中で共生していくための能力」(文化庁, 2021)を適切に評価・育成することを目的に策定され(文

化庁，2021）欧州を中心に世界中で言語教育の基準として用いられている「欧州言語共通参照枠（CEFR: Common European Framework of Reference for Languages）」を参考に5つの言語活動（聞くこと、読むこと、話すこと（やりとり）、話すこと（発表）、書くこと）を「何ができるか(can-do)」によって6レベルの熟達度で評価する形で作成されている（文化庁，2021）。熟達度はA1からC2までの6段階で示されており、A1、A2、B1、B2、C1、C2の順に日本語能力が高くなる。A1・A2は基礎段階の言語使用者、B1・B2は自立した言語使用者、C1・C2は熟達した言語使用者として位置付けられている（文化庁，2021）。

日本語教育の参照枠では、学習者を、「言語を用いて社会の中で課題を遂行する社会的存在」（文化庁，2021）として捉えており国際交流基金が2010年に開発した「JF 日本語教育スタンダード（JFS）」とも共通する部分が多い。JFSはCEFRの理念に基づいて開発された日本語教育の枠組みで（国際交流基金，2010）、日本語の熟達度を「～ができる（Can-do）」という形式で記述したものであるが、今回の参照枠は、これをさらに公的な指針として日本国内の教育現場全般に適用できるよう整理したものである。

2.2 なぜ「参照枠」が必要となったのか

日本国内外での日本語学習者多様化を受け、日本国内での高等教育機関への進学や就労を目指す外国人を対象とした日本語教育の質保証を図るためには、学習者の日本語能力を共通の基準で把握し、教育機関による評価のばらつきをできるだけ小さくすることが求められるようになった（文化庁，2021）。

従来、日本の日本語教育、特に大学等の高等教育機関への進学を目的とする本別科においては、語彙や文法の知識を中心とした「聞くこと」「読むこと」に関する教育と評価が主流であった。しかし、学習者の背景や学習環境は多様化しており、大学生活や日常生活で必要となる実践的なコミュニケーション能力を適切に評価する必要性が認識されるようになった。そのため、従来の筆記試験だけでは把握しにくい「話すこと（やりとり）」の能力をどのように測定するかが課題となった。本別科では、このような日本語教育の参照枠における評価観の変化を踏まえ、「やりとり」の能力を把握するための手法としてJFS準拠ロールプレイテストを導入した。また、近年進められている認定日本語教育機関制度においても、学習者の日本語能力を適切に把握・評価することの重要性が高まっており（文部科学省，2025）、本別科におけるプレイスメントテストの見直しは、日本語教育の参照枠が示す「何ができるか（Can-do）」という評価観を取り入れるとともに、こうした制度的動向を見据えた取り組みでもある。図1は、その背景となる考え方と本別科の取り組みとの関係を示したものである。

日本語教育の参照枠とロールプレイトテスト導入の関係

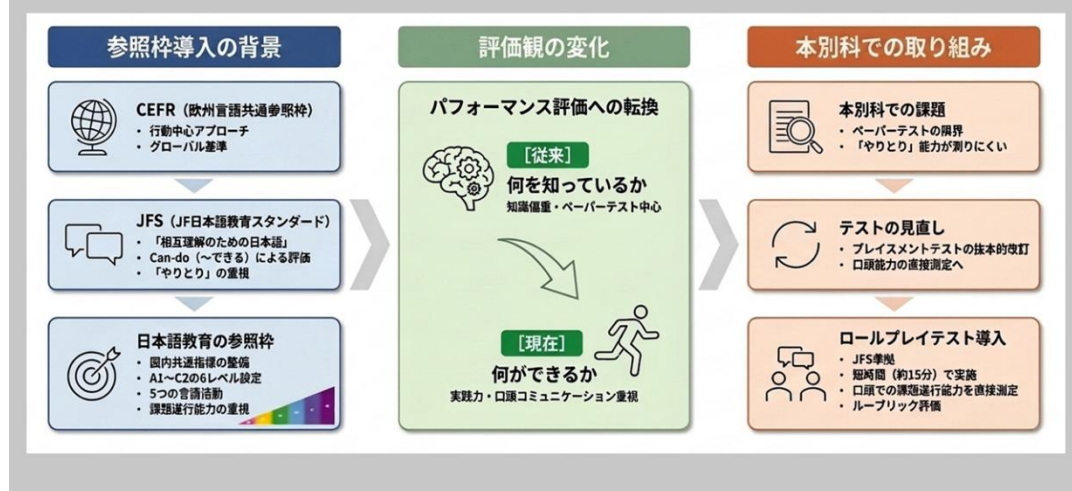


図1 日本語教育の参照枠とロールプレイトテスト導入の関係（筆者が作図）

3. 本別科におけるプレイスメントテストの課題

3.1 従来の評価方法における課題と「ずれ」の顕在化

本別科では長年にわたり、語彙・文法・聴解を中心とする独自の筆記試験を実施してきた。限られた時間で知識面を把握するうえでは有効であったが、クラス配置後には、筆記成績と実際のやりとりの様子にずれが見られることがあった。

具体的には、筆記の成績は高いが会話のやりとりに戸惑う学生、反対に筆記では十分に力を出しきれないが、口頭では相手と協力しながら課題を達成できる学生が見られた。こうした経験から、知識の量だけでなく、実際に日本語を使って課題を進める力も見たいという必要性が高まった。

3.2 プレイスメントテストの段階的な見直し

上述した課題を解決するため、本別科では数年をかけてプレイスメントテストの見直しを進めてきた。本別科では、従来の独自筆記試験中心の評価から、ロールプレイトテストの導入、さらに客観的評価として無料提供されている筑波日本語テスト集（TTBJ）との組み合わせによる評価体制へと段階的に移行した。その結果、知識面と「やりとり」の能力を異なる観点から把握できる体制が整備された。その変遷を表1に示す。

表1 本別科プレイスメントテストにおける評価方法の変化

比較項目	2024 年度	2025 年度	2026 年度
筆記試験	オリジナルテスト (語彙・文法・聴解)	オリジナルテスト (語彙・文法・聴解・読 解・作文)	TTBJ (SPOT90 Grammar90 漢字 SPOT50)
口頭能力評価	面接 (口頭試問)	JFS 準拠ロールプレイ テスト	JFS 準拠ロールプレイ テスト
評価基準	独自基準	独自基準 + JFS Can-do	TTBJ + JFS Can-do
評価対象	言語知識中心	言語知識 + やりとり能力	言語知識 + やりとり能力
評価体制	筆記試験 + 面接	筆記試験 + ロールプレイテスト	CBT + ロールプレイテスト

4. JFS 準拠ロールプレイテストの設計と導入

4.1 導入のねらいと実施形式

前述したプレイスメントテストの課題を解決するため、本別科では、国際交流基金が公開している「JF 日本語教育スタンダード (JFS) 準拠ロールプレイテスト (以下、ロールプレイテスト)」を導入した。このテストを選択した主なねらいは、学習者の「やりとり」の能力を、JFS の Can-do に基づいて把握することにある。

実施は教員と学生による一対一形式で行い、1 人あたり約 15 分で実施した。この短時間での実施は、限られた日程の中で多くの新入生を判定しなければならない本別科においても、実施しやすい形式であった。

4.2 タスクの設計と Can-do の活用

本テストにおける評価の軸となるのは、JFS が定義する「～ができる (Can-do)」という能力記述文である。テストでは、A1 から、B2 (必要に応じて C1) までの各レベルに対応した具体的なタスクが設定されている。

例えば、初級段階であれば「店で買い物をする」といった日常生活に密着したタスク、中級段階であれば「問題が起きたことを説明し、交渉する」といった、より複雑な状況でのやりとりが求められる。受験者は、提示された「ロールカード」に従って特定の役割を演じ、対話相手 (評価者) と協力しながら課題の達成を目指す。

また、多言語版のロールカードが用意されているため、学習者は状況設定を十分に理解した上で課題に取り組むことができる。これにより、文字知識の影響を受けにくい形で「やり

とり」の能力を把握しやすくなった。

4.3 評価の観点と判定の流れ

評価に際しては、言語知識の正確さのみを問うのではなく、「最終的に課題が達成されたか」という達成度を重視している。評価者は、JFS のレベル基準に基づいた「判定用記入用紙」と「ガイドライン」を用い、以下の3段階を中心とした判定を行う。

◎（そのレベルの課題を十分に達成できた）： そのレベル以上の可能性がある。

○（そのレベルの課題をおおむね達成できた）： そのレベルの能力を有している。

△（そのレベルの課題を達成できなかった）： そのレベルには達していない。

このように、具体的なパフォーマンスを共通の「ものさし」に照らして判定することで、複数の教員が評価に携わる場合でも、評価のばらつきを抑えやすくなった。

4.4 運営上の工夫と小規模環境での適応

本別科のような小規模な組織でロールプレイテストを継続的に運用するためには、運営の簡便化が不可欠である。そこで、公開されている「テスト用キット」を全面的に活用し、テスターとなる教員間での事前研修を最小限の負担で実施できるよう工夫した。

具体的には、評価者間で判定基準の認識をそろえるため、事前に音声サンプルを用いた確認を行った。また、プレイメントテストの全体工程の中に、TTBJ による知識評価とロールプレイによる遂行能力評価を並行して実施することで、学習者の日本語能力を、複数の観点から把握できるようにした。

5. ロールプレイテスト導入の成果と意義

5.1 学習者理解の広がり

ロールプレイテストを導入したことで、従来の筆記試験では把握しにくかった学習者の特徴が見えやすくなった。とくに、文字知識の影響を受けやすい非漢字圏の学生についても、多言語版ロールカードを用いることで状況理解を支えながら、やりとりそのものの様子を観察できるようになった。

実際に、2026 年度入学生 28 名のうち、TTBJ では下位群に位置したものの、ロールプレイテストでは B1 相当と判定された学習者が 7 名見られた。このような結果は、知識面の評価だけでは把握しにくい課題遂行能力の存在を示唆している。

その結果、本別科では、学習者の能力を単一の尺度で捉えるのではなく、知識面とやりとり能力の両面から把握する必要性を改めて認識することとなった。

5.2 クラス配置と教員間の情報共有

ロールプレイテストによって得られた情報に、TTBJ などによる知識面の結果をあわせて見ることで、学習者の日本語能力を多面的に捉えながらクラス配置を検討できるようになった。それだけでなく、担当教員間で学生の特徴を共有するための資料としても有効である。

たとえば、「言語知識の評価は高いが、やりとりの遂行には支援が必要である」「言語知識には課題が見られるが、やりとりによる課題遂行は比較的安定している」といった情報を共有することで、担当教員は授業開始時から学習者の特徴を把握しやすくなった。

5.3 授業とのつながり

本別科では、授業においても「話すこと（やりとり）」や「話すこと（発表）」についてルーブリックを用いた評価を行っている。プレイスメントテストにおいてロールプレイテストを導入したことで、入学時の段階から「話すこと」の能力を把握できるようになり、単なるクラス配置のための評価にとどまらず、その後の授業における口頭能力評価との接続を意識した評価として位置づけることが可能となった。今後は、入学時のプレイスメントテストの結果と、学期末あるいは修了時の評価結果を比較し、学習者の「話すこと」の能力がどのように変化したのかについて検証を進めていきたい。

6.今後の課題と展望

本評価体制の有効性や妥当性については、まだ十分な実証的検証が行われていない。ロールプレイテストで見られた特徴が、その後の授業の中でどのように変化するのか、また TTBJ による知識面の結果とどのような関係を持つのかについては、今後、継続的に確認していく必要がある。

また、教員間で共有した評価情報を、授業改善や個別支援にどのように結びつけるかについても、より整理された運用方法が求められる。今後は、実践を重ねながら、プレイスメントテストと授業評価との接続をさらに明確にしていきたい。

7.おわりに

本稿では、日本語教育の参照枠の理念を踏まえ、岡山理科大学留学生別科におけるプレイスメントテストの見直しについて報告した。特に、従来の語彙・文法等の知識中心の評価に加え、「話すこと（やりとり）」の能力を把握するために JFS 準拠ロールプレイテストを導入し、TTBJ と組み合わせた多面的な評価体制への移行の過程を整理した。

また、本取り組みを通して、学習者の能力を「何を知っているか」だけでなく、「何ができるか」という観点から捉える評価観の重要性が改めて確認された。さらに、プレイスメントテストの結果を授業における評価や学習支援へと接続していく必要性についても示された。

一方で、本評価体制の運用はまだ発展途上にあり、その有効性や妥当性については今後の継続的な検証が求められる。

参考文献

- (1) 国際交流基金 (2010) 『JF 日本語教育スタンダード』
- (2) 文化審議会国語分科会 (2021) 『日本語教育の参照枠』 文化庁
<https://www.jfstandard.jp/standard/ja/render.do> (2026 年 6 月 8 日閲覧)
- (3) 国際交流基金 『JF 日本語教育スタンダード準拠ロールプレイテスト』
<https://www.jfstandard.jp/roleplay/ja/render.do> (2026 年 6 月 8 日閲覧)
- (4) 筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語学習環境支援共同利用拠点『TTBJ (筑波日本語テスト集)』 <https://ttbj.cegloc.tsukuba.ac.jp/> (2026 年 6 月 8 日閲覧)
- (5) 文部科学省「認定日本語教育機関の認定等に関すること」
https://www.mext.go.jp/a_menu/nihongo_kyoiku/mext_02666.html (2026 年 6 月 8 日閲覧)

【編集後記】

「国際教育研究フォーラム」第 107 号では小山悦司所長、竹ノ下祐二氏、益谷美香氏の 3 編のエッセイを掲載しました。小山所長からは政治情勢や安全保障、各国の移民政策により、留学生市場は従来の米英加豪への集中が弱まり、独仏日シンガポールなどへの移動が増加するなど新たに再編が進んでいる。少子化による学生数の減少や高度人材不足が進んでいる日本は優秀な留学生を呼び込む好機である。そのためには、英語による教育プログラムの充実、研究環境の国際化、卒業後の就職支援や在留制度の整備などを総合的に進め、地域社会や企業との連携の強化により、留学生が安心して学び、働き、生活できる環境の整備などに取り組むことが不可欠であるとの報告がなされた。また竹ノ下氏からは 1999 年よりガボン共和国において継続している、野生ニシローランドゴリラの長期野外研究プロジェクトにおけるこれまでの主要な研究成果と、生息国研究者・住民との協働のあり方について報告がなされた。さらに益谷氏からは岡山理科大学留学生別科でプレイスメントテストの見直しをする理由、導入のプロセス、導入による成果及び課題についての報告がなされた。

今回掲載しました 3 編はテーマが異なりますが、3 編とも今までにない読み応えのあるものになっており、興味を持って読んで頂けると確信しています。(T.A.)

編集・発行：国際教育研究所
〒710-0821 倉敷市川西町 11-30
加計国際学術交流センター内
TEL (086) 423-1611 (代)
URL : <https://www.kake.ac.jp/iie/>
e-mail : iie@edu.kake.ac.jp